

して、机間指導をおこなった。グループ学習は、話し合いの中で新たに気付いたり、読みが深められたりしたので効果的であった。しかし、グループ学習は、長い期間をかけて意図的に訓練していかないと、生徒が活発に学習活動を展開しないという面もあった。

## 【授業実践4】 高等学校第1学年「虫のいろいろ」

### (1) 授業研究にあたって

「見通しをもって読み解く国語科指導法」という研究主題に基づき、生徒が小説の学習に主体的に取り組むための指導法を考えた。出来るだけ生徒自身の力で目標を達成できるように、教師はどのようなかわり方をしたらよいか検討した結果、発問の組み立てを工夫することを試みた。

「虫のいろいろ」は、高等学校に入学して初めての小説教材である。この小説はユーモアのある短い作品であり、生徒が抵抗なく読むことのできる教材である。ここでは、心情を読み取ることに重点をおいて授業を実践することにした。次はその学習指導案である。

### 高等学校(機械科) 第1学年 国語科学習指導案

- 1 単元(教材) 小説(一) 虫のいろいろ(尾崎一雄)
- 2 目標(省略)
- 3 単元について(省略)
- 4 指導計画(6時間取扱い)
  - 第1時 全文を読んで、初発の感想を書く。(教科書に載せていない部分もプリントして配付)
  - 第2時 第1段落を通読し、辞書を用いて重要語句の意味や漢字の読みを調べる。
  - 第3時 登場してくる虫や人物から、誰が主人公なのかをつかむ。また、主人公の気持ちの変化を読み取る。(本時)
  - 第4時 第2段落を通読し、辞書を用いて重要語句の意味や漢字の読みを調べる。
  - 第5時 「私」と「家の者」との考え方の相違を整理し、主人公の気持ちを読み取る。
  - 第6時 配付された「まとめのプリント」をやり、勉強してきた内容を確認する。

### 5 本時の指導

- (1) 目標 主人公をとらえ、話題を整理して、主人公の気持ちを読み取ることができる。

#### (2) 展開

※は評価

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 第1段落の中で、登場してくるものを抜き出す。 のみ、蜂、私、友人 2 のみ、蜂、私、友人が登場していることがわかったところで主人公は誰かを読み取る。 小説を読むときの注意点 <ヒント1> 主人公の気持ちの変化を押さえることが大事。 <ヒント2> 気持ちを表す文章が多く書かれているものを探し出す。	・教師の音読後、生徒各自に黙読させ、登場してくるものすべてに傍線を引かせる。 ・発問とヒントによって、主人公をつかむ見通しを持たせる。 ・発問し、指名した生徒に発表させる。発表ができないときは<ヒント1>・<ヒント2>を出す。 ※主人公は虫でなく「私」であることがつかめたか。(発表)
3 のみ、蜂の話は話題であることがつかめたところで、 ①両者の話題を整理する。 ②両者の話題を比較する。 できるのにあきらめてしまったのみ 不可能を可能にした蜂	・のみ、蜂の話は第1段落のどこからどこまでに書かれているかを発問する。 ①両者の行動を箇条書きにして、まとめさせる。 机間指導をし、整理できない生徒には助言する。 ②こののみと蜂の違いを発問し、正反対であることに気付かせる。 ・文中に「私」の置かれている状況がわかるところに傍線を引かせる。 「東京から見舞いがたら遊びに来た友人」
4 主人公の心情を読み取る。 (1) 主人公の置かれている状況をつかむ。 「私」は健康を害して自宅で臥している。 (2) 主人公の心情の変化をまとめる。	・第2段落にも目を向けさせ、探させる。 「はえは、うるさい。もう冬だから、陽盛りにしか出て来ないが、布団にあごまで埋めた私の顔まで遊び場にする。」 ・のみと蜂の話聞いた後の私の気持ちを文中から抜き取らせ、どのように変化したかを考えさせる。 ※主人公の気持ちがマイナスの気持ちからプラスの気持ちに変化していることを読み取れたか。(発表)
話題のみ 私 ———— 物憂さ ↓ 蜂 ———— 勇気づけられる	± - +

## (2) 発問の工夫による読み解きの実際

### ア 主人公を読み解く手掛かりをとらえる発問とヒント

登場するものを押さえても、初発の感想を見ると、いくつかの出来事ばかりに目がいて、主人公は何かつかめない生徒が多い。主人公が何かをつかむことが、この小説を読み解く上で不可欠である。そこで、主人公を押さえるために、発問とヒントを工夫した。

#### 資料7 授業記録

T: のみ、蜂、私、友人が出てくるけれど、この中で主人公は何だろう。  
S: のみです。  
S: 蜂です。  
S: のみと蜂です。  
S: 私です。  
T: それぞれ発表した主人公が、なぜ、主人公なのか説明してください。  
S: なんとなく。  
S: たぶんそうだろうと思っただけです。  
T: なんとなくでは文章を正確に読んだことにはならないので、主人公を見つけるヒントを出しましょう。それは、気持ちを表す文章や語句が多いものを探すことです。  
T: 「～と思った。」「～と感じた。」などと書いてあるところを見つけることだよ。

ここでは、文章表現を押さえながら読むことができていなかった(資料7 S<sub>5</sub>, S<sub>6</sub>)ので、まず、読み解く活動が文章に即して進められるように指導した。次に、読み解く手掛かりは、文章にどのように表現されているのかをヒントを出してとらえられるようにした。最初のヒントでは、気持ちを表す語句がどのようなものか理解できなかった生徒が見られたので、さらに具体的な表現をヒントにした。この結果、該当する箇所を挙げることができ、主人公は「私」であることが理解できた。

### イ 主人公の心情を読み解く発問

話題を整理する発問によってのみと蜂の違いを理解し、「私」の心情の変化をとらえる学習へ結び付けた。「私」の心情を読み解く流れとしては、「私」がどのような状況にあるのかをとらえ、のみと蜂の違いをどのように見ているかということとを重ね合わせることによって、心情の変化の過程を読み取ることができるようにしたいと考えた。「私」の状況を読み取る場合、第2段落も含めて考えるように助言した。また、アでも述べたように、文章表現を押さえながら正確に読むという学習を積み重ねることができるようにした。

#### 資料8 授業記録

T: のみと蜂の違いが分かったところで、これから、「私」がのみと蜂の話題に触れてどのような気持ちになったかを読み取っていきます。その前に、「私」は今どんな状態におかれているか、それが分かるところに傍線を引いてみなさい。  
S: 「東京から見舞いがてら」という部分です。  
S: 「布団にあごまで埋めた私の顔まで遊び場にする。」もそうです。



- S<sub>9</sub> 「はえは、うるさい。もう冬だから、陽盛りにしか出て来ない。」の部分もそうだと思います。
- T<sub>6</sub> これらから考えると、「私」はどんな状態なんだろう。
- S<sub>10</sub> 「見舞いがてら」とか「布団にあごまで埋めた」というところから病気で寝ているのだろうと思います。
- T<sub>7</sub> そう、病気なんだろうね。今度は文章の表現を押さえて読み取れたね。次に、病気で床の中にいる「私」は、のみの話を聞いてどのような気持ちになったんだろう。のみの話を聞いた後の「私」の気持ちを表している語句をノートに抜き出しなさい。
- S<sub>11</sub> 「無残」、「ひどい話だ。」、「同情に値する。」、「残念だね。」
- S<sub>12</sub> 「物憂さ」
- T<sub>8</sub> 物憂さとは何となく心が晴れず、けだるい様子をいうんだね。蜂の話については。
- S<sub>13</sub> 「十分おもしろいです。」
- S<sub>14</sub> 「物憂さから立ち直ることができた。」
- T<sub>9</sub> のみの話を聞いた時と蜂の話を聞いた時では、「私」の気持ちは変化しているよね。どのように変化しているのだろうか。
- S<sub>15</sub> のみの時はがっかりしていたんだけど、蜂の話で勇気づけられている。

資料8の授業記録に見られるように、ここでは2箇所の発問（T<sub>6</sub>、T<sub>7</sub>）で、文や語句を抜き出してそこから「私」の状態と気持ちを読み取るように促した。直接的に表現していない部分の読み取りに抵抗のある生徒が多いので、細かな表現にも読みの意識をもつようにする助言は大事である。生徒たちは、「私」の状態をつかみ、のみと蜂に対する「私」の気持ちを表わしている語句を見つけ出すことによって、「私」の心情の推移を理解した。

### (3) 考 察

ア 質問して生徒が答えられなければ、教師が答えを提示して説明するやり方から、教師の発問とヒントによって、内容を整理したり、比較したりしながら、主人公の心情をつかむという目的まで生徒自身の力で到達できるように考えてみた。登場人物を抜き出し、その中で主人公は何かをつかむ。さらに、話題を整理、比較し、主人公の置かれた状況をとらえ、「私」の気持ちの変化をつかむことによって、「私」の心情にせまれるように発問を組み立てた。その結果、読み解いていく手掛かりをつかんだ生徒は、意欲的に「私」の心情を追究した。

イ 発問をしたら生徒が考える時間を保証し、生徒の様子を見守ることを通して生徒の反応に対して、より適切な助言が可能である。生徒は、発問によく反応し、熱心に自力で考えていた。文章表現を押さえて、主人公、状態、気持ちなどを正確にとらえ、目標である心情を読み取ることができた。この実践では、生徒の実態に合った発問の組み立てができたと考える。

ウ 小説を読む学習は、考えを一つにまとめないことが多いために、生徒の側からすれば、はっきりしない厄介な学習なのであろう。しかし、読み解くための手掛かりがつかめれば、読みの見通しがついて、押さえるべき文章表現も明らかになり、生徒は意欲的に学習に取り組むようになった。

今後は、生徒の実態に応じた発問と解決のための話し合い活動を通して、生徒自身の力で見通しをたてて読み解いていくように進めていきたい。